関清水物語

863
137

国立国会図書館　タイトル『関清水物語』 請求記号 863-137

ガラス使用

八六三—一三七
特別
和露文庫

發端

わか年比あれ諧の道ふけいつれかくのゆ
しき隈くなきも一たひハ立都探りまほしく
思ふ人を行来ぬいまにふハ遠き遊行を
きて古のかく月を過しぬある人にふ伝
なん思ひて大津の驛より三やこ三条のあら、
里まくを折くゆきかひある逢坂の関
おとふ日乃あらた程ほとも体ひかの大地を

此趣をきゝにおもしろひ侍るに人々この趣旨を述
とらも此のはうらゆかしきに名まくもえらん紙
せめとゝふみまとゞまりこゝろをおもひ立みと
こゝろ紙のくの具なと尤すめて知ら出侍る
此ハきゝきらに筆のあら出ハ海にあら風もなう
くしみ馬のすゝ音なといとまやうなる
なる

花人とおもへハ宮古二月哉　千當

唐みすれ花ハその名の草まち花　陶
おかしきに茶摘袷を染あけて寸　龍
釣の垂糸乃はらにかくこそ戸　當
あふらしきゝ穀のあるに月涼し　陶
ちゝこに鮓のはとをかうすれ　龍
川添に舟よくくと呼ハまともも　當
旭のよ紙あふ杖に月まゝり　陶
一言ハ萩にもあらで根ちまし　龍

茶挽かしてハいそきい赤示　當
よしそれよ軍の沙汰もあらはあれ　陶
遊女葬る鉦きゝ素執　龍
すゝ足ふ何やら埋む松の石　當
三ゆきゝ乃注連の動く卯日　陶
小鳥ハ月ゝおしんと啼るらう　龍
うき世の花うけし槿て垂　當
笹山へ和を重ねるを折ふ中り　陶

をくハ皷のつらんむりけ拵　龍
風呂焚の薪をよこし小蝶のまて　當
あふなんは井戸ほまちなふ堀　陶
明神乃いやちる神輿早なるきい　龍
おます並へふともし火の下　當
山茶花のおろかと落る鶏の声　陶
清書ろせり席る七り子　龍
目のよきふ百よなる追綱をれきい　當

月夜〳〵におとす板ひさし　陶

元興寺の鐘かうなれハ柳ちる　龍

かまはちらゝさく秋風一輪　當

洗の盃をかるふに捨てちらす　陶

いちらとらつ〳〵衰こゝろゝ　龍

きらい白毛おハぬけはハおハぬや　當

是ゆおしらうせぬ如前川　陶

きらわ都ふ笹のうけり海老の売　龍

夕日のうけりふ算の鷺かの　當

このきハ竹かうらミて花おそき　陶

蝶のみ程亀乃さ出凡　龍

一念おもし新つの會ふ伏ちかきしを句

おし暁是色をなして論仍不ませるさい

みもおりく得しうちえせ伏ちハちんかいやめふ

せらう人しやといふるまふ家り帰もなもたもう

国立国会図書館　タイトル『関清水物語』 請求記号 863-137

ガラス使用

又十句をほくりてちゆらり菖雨の門を無く
句ごとに言葉みなありとて曉臺より許しこひ感
ありて二句まで給ひしと申なり

元朝やくらきより人あらはれて　曉臺

乙鳥ある言葉親子なる夫婦かな　似青

やミの夜やむつかしさうな梅の花　許風

きゝよしハちる花をみに歩行けり　桐又

咲ありや言葉に堺まる蛙かな　奥村

ちる梅や末は浮世の定なれば　嵐鷺

花の月外にハやはしきに拂ふてを　花陶

軒の雁おちるかなまゝ生のる雲の月　鈍明

苗代にゆきて斗田の中よりへに　河伯

黄鳥のちりにちりるまあるな　無甲

芽はきぬ梅十ありて咲の芽かな　金亀

鶯もちりての桜そ梅の月　呉笠

花の衣ちりてさつても畑の音　喜入

まつりに押しつゝ作者の傍りに　寸彩
盃のうへに住かふ胡蝶哉　む露
まけう蛉や苫の中より鳴り蛙　巨董
花の木や一ゑにあつまる雨の中　千當
一遍はのまはいとせつりしき中より人ありけりをとき、
あまりのくれしきを求てせんすへなしを
いふ折あしくも琉球の名醫某の駅にてこひ遊せ
をねかふにたのみて薬をもられけるにこゝにへなり
けられしといふ中りつきて文字りの称ひあり
朱樹翁となし肴こゆる人家ちかき禅のよし
其の程もなくさるひぬるは是にむなしき事乃
ことやけやあるへきといひけるとぞ
日の出るなへて櫻乃木の高さ哉　士朗
わか國の鼻ちゞめ不二の山　岳輅
俺しまゝ宿へかへるは梅の花　桂丘

笹の葉にまりつる寺の小宮か　天竜

とく山や桜にはさく松葉ちる　松兄

行春の氣色をこほる小笹哉　左雀

山科や竹うかしけく寺のせ　大隼

鶯の梅まて梅ありめ春雨　雀人

蛙なく夜にや馬に乱れ来て　羅城

花咲く盃まかさし行の郎　大穣

ちり行くと目のくりまわの山桜　野雀

蝶のとふ行かりまて眠る八葉の上　竹百

宴うらし宮のまつり梅まつりきかり　駐六

状に添てあらうまもの文行かず　臥央

一金谷梅写うるもとめに應して画に術をなるに大分
の長刀をもとめ金こ之妹しうけて
かきし得るに無きあらいた画師寺に
とらひく大長刀うちかけて出行梅写けしのより

此日より年賀に似るゝし行新
としを迎ふるとし

梅の花目もあやに咲ける夜が　千当

寄られも月に枸杞はじめあまし哉　芳之

逢坂のさしつかく来て芽立けり　鳥頂

吉野よその名梅に入笑可雛　亜僕

蝶鳥の徐ゝる祥あれ芭の芽　佳鏡

塘から万歳もはや来れりと　古桔

家まくハ波も硬く凍磯若菜　蓬阜

鶯とも聞くハ何の小鳥　一ち南　馳川

一羽追へハ二羽よ何能や麦の芽　罷山

薮まろね家ハまれなり聯月　鶯功

蜂の巣て花の隣とめにそ利　丑朱

一相の比南浩よあかりて勝手といふ中あひ痛かり
さむるにもなくへをといつも命にかくる事ある

あんあれハ見ゑるしきに中り人をさそひけり
ハとや思ひきん桂川か身をしつめても哀く
成き候附

天竺佛の作よりて沼菊を桂川の
あはれにまつる

花色の山をもてしか立をけハかわりなき
ことハいつの昔そと書てのこりし筆あるとそ

春雨におもはれて桜を隔かなり　桐五

あり川の鐘ねくまの菜の花　許洗

家移りの心の先へ蛇のまで　千壹

子を捨ハせるに本ゆるあかたし　呂、笠

よむ形に瓢をくくし秋の月　洗

ち緒りくまる萩の小嵐　虫

ちつとしてる居きハ緑きき世の中や　笠

高雄のたのに焼きりをほく　菊

かとき原何のかくひを音　杯山

ほしふせて萩柑子さく　凡
日の旨ハ酒によれとの笛をふき　菊
蔓つりける大鍋を買　笠
ちつぎりところてんを振る子武康　凡
志賀の尾を月り堀るとて　五
侍金の刀をさしほもやさとき　笠
くろつ行家へ来れはまた板　菊
咲つくとかゝりける米売る枝の花　五

川のむしひに菁を留ちまま　凡
産子も忌のあとよと嘆きまりう　菊
おもろの枕を結ふしてをく　笠
ちるもろの梅なるもハとてけしの蔵　凡
作ふも一度ハ於ゝ留むしろ雨　五
あれをみよ又山崎の火をなくて　笠
耳つかゆきいを撚すできいち　菊
年寄りの茶の唐まゐるなしハ　五

くも井まろの侍り花さく　風
押なへてかめの神の御ゆるし　蘭
二日の月はいそく　鮎賣　笠
おり秋の気色をつくる竹の上　風
西凡の手の盃りこほれて　丘
人並み誰广おもふ茶合て　笠
うそぶきに中の夜にゆるやか　蘭
白馬に霰の甲とぬれかすい　丘

もし錢ゆるは厳のいさむ日　風
二三本の花とゆはおちる八重桜　蘭
襟をゆるむ万歳の宿　笠

一二輪は花に咲ては八柿壺といへる仙僧の小室をはなれて

咲かぬうちより月の野梅に　長秋
姑鬼やや年老はての梅一本　魯隠

梅かゝに夜ハめつらし山端の月　玉瑞
花のかや茶碗ほとりや鳥のおく　亭御
咎はあれと手かけたるよ猫の恋　千当
黄ハまつ見てもせく初音かな　五韶
山あかまるゝ人も霞むや畑から　桐栖

一あるとき茶屋に関の宮とハ云酒をさゝふ
を食みきかり其さ席赤禄なる腰子七寸斗の
しふ紙をそてまきし帯目あまし尺ふまりせく
銘酒喜升を出したにまかしうちふつかる
団もあやなくなかへもとの瓢を叩く歌てま
世人皆酔り吾独醒たる人の交よりも言
て何かせんいつへハふこう山の井のあとい
く帰りきけるとぞ
さゝ波や花の宿かる七處　阜他
世の夜や立もかくふ鴨の声　玉肩

朧より杯ハ出きり初かすミ　若人

かへるに厂豆ハそれとも思ハすや　豆市

年の角花ふ落ぬも衣あけり　如毛

ちの中ゟ富ふもかゝる岸の梅　柳荘

掛しまうて人かしをよれ時蛙　蕉雨

青柳ハ体つりハそれとも遥かなり　他可

かへる子隅々ハそなるミえて中りぬ　左琴

作よの命花ふあけきく春の家　千當

目をあけハ日の當てある櫻かな　丶

酒籠や豆腐和らく時代の花　象兆

今すこしたしなくもか菫草　一象丶

金気なくもなかりぬ角田川　素蛾

素のみもぬきはいつこまく　完未

菜の花や海津ハとりまき紫苑　武陵

山吹の一重垣あり家買ん　巻昌

花の手まはしくの桜ぞや　以美

一幻住庵にあまたたびける事をなしはべりて、この程ハ七日七夜も秋ふかきと経道ついふなかなか寒さを雨まで又押しうつしと目きゝして宿と風月のちひ人もやおもふらんものゝあはれを書つけはべりし栖なりしをやとなりしあさい

花薄なびくの庵にもまどなし　千當

ちまする萩を押へて日ハ暮し　雄渕

梅かゝの吹散ての夜山の雲　馬年

まちかねし戸をゆすりつるねの須　恒丸

梅かゝ乃まくらにそゝぐ黒茶碗　素竹

野義のちらくしきよ書乃海　雨蘭

梅の花人に維かと自身一しし　藍童

ゆかりや何波をなぞ初桜　文亭

三のもの押えて吹柳かな　支麻

何先のもち出なき北月　芷粧

山くや霞をはなれ鳥の声　几頂

初鮒や仲のよさそ桶の中　欽雄

ましあるや夜汐ふあかりて春の月　子孝

れ書の日それふわりしきい籬かな　清見

わか家をはなれて見るまの梅の花　秋守

一ちか海の子明ゐきの山見てくおくのまへくだる

とく東ふそわ廿とせあまりの昔侍りしみけれの

句あまとて

見さけある日まく梅ハちまふそわりと書を

わきあるの梅くよけりは帰きあくゐ上の日野ふ出むかふ

しそのあるちる梅のあり匂を詠ふハあすあるる

深山木と手けハ淋しきもわ小鶴為

一枝ふ紅る出くわ柳　漢叟

良しう桜ふハ重ハあわりさり　菜蔥

花さわせる遊まくしふ這入あり　故亭

米つきにこまかえ細の男かな　千當
鯛の目におちかゝりてさき行　埒文
菜の芦や花を尋る蛇のもと　團丈
かきつはた城下のまや妻の子　吉楓
萩の木八宮で居ましる梅の花　但呂
菜は花はいつ近ときゝ千田かな　千穀
一尾張は但青まで使をつかへ早田の米をかゝへ行
にへく場所はらず粥を煮て竹のくとまて
ありしことを
原行や居桜の山は見る日日　千當
菜の花をそれむ葉乃ちれ　士朗
子どもにかゝ鞍つくるや更ぬらん　阜他
宮のうし行の壁はるあり　許風
やく来は月の出うる松のよ　花陶
をの晩はく出との秋かせ　嵐賀

手まねきのせく唸せる奈良の麻　松兄

まけくならぬ渋糸を干けり　貫牧

笹の葉れ又散く来ゐ鈎郎　桐立

髪あらう日も手傳て居る　當

なり柿乃洞ゝおりる觀　郎

霞の中ふ見え中ふ三日月　池

梅檀の実をほふくと空寄り　賀

いおりの中りお佛おりまれ　五

傘の雨ふ濡るるまもしろ　高

目籠をよまふ蓮まんおり　陶

世まはまふたりふ居とあまり　兄

戸をゆて中ふ猫の通ひ径　郎

夕ぐれの秋よ至すは戸の星　晃

まもれ螺の方風襄の毛　賓

十月の梅の梢ふ酒みきいす　郎

瓢を食くた食おりしきい　陶

あら時は夜鴨の身にも立まさり　郎

又残しける早苗なりけり　五

葉折を出き八月夜の祢かな　尚

捨て秋志ら君に待せもせで　池

まい事を菊の陰よからうして　兄

竹静なる釣乃糸より大　五

ちらくと苫をもれて峰崖　郎

余音乃海也ありの淋しき　尚

宿かりて旅人ハ萬揚てもたらる　兄

粟はけまり牛を追出し　実

ちる花を宮の光とみのけて　郎

柳をおこし壬生乃入相　陶

それの寄る田螺の声ハせざる　牧

大寺しきある青雲乃かな　筆

鐘の村田一枚つ虎なり　蒼虬

笠の影見すてあられの月　去来
はらとりて烏も子の思ひかな　芦涯
あら寒や暮し膝の手の中　李傔
道すがら節梅ある方へわかれけり　土卯
行居ればこまりし敷て住家かな　百池
あふちふる木の高くのぞみは人　篁鳥
山桜ふり返り行ある表乃為　雄李
春の野や手に提て行足袋の砂　斉良

春の夜は月を出まつ馬のうへ人　于當
遊ぶ気で出る正月の梅ぞころし　馮月
梅咲や門より奥のもとゝ寺　若翁
柳先青し見ゆる伊勢の玉垣　椿堂
青柳の泉鮎にやありぬべき　推己
子供等に一枝折く梅の花　古海
めづらしき花ではなくて梅の花　竹彦
花の咲け遅くれて咲し二の山　千阿

ぬてくしてみた何を枕の野分かな　荷兮

一今年もむかし吉行法師が法の寓居を傍よりてみる
三年めの夏ハ旅をそれと仏皆とて人々ハそれし
うちて三日三夜をあそびあかして星ハ出鍋の食
をかけよろハみ布のまうんをかけて三布よ
客をそへてあそびける

居寝て寝せぬ給侍の誰月夜　吉阿

あさ簾乃弟子綱引のたもとかな　千尚

小雀の口ひらけよ秋の色かな　但

天あくや小海をのぼる芦の上　土雄

読ても残れハ一つ簾の嗅なり　方明

逢坂や鳥ハ杖の関古き　黄山

夕海を晴しまなる角力なる　守洋

名月や子を喰べきよるのうち　兼二

名月や名にあるものハ山とそ　志ゝ

釣人の引くる野寺かな　梅石

一葉翁の一葉ありてふちにあるかしハ七十ばかりの
としおひくゝるらかなでも壮の世を経て、けふの
といひきれハ一葉以上十八丈赤裏の小袖ある
ちらりと板をも懐に入てはたらくと
死すとつへハさるありしきいるかにかなしくなく
の小袖をせく志ん町のかさまたもとはハを

葉ちと経

一葉　葉の戸や野良の細ハ雲にかゝき
千翁　曽らぬ月て出し野の月
芳俣　栽浅く楼にはゞ旭かな
文山　山住し平安下戸月のちく
記蝶　むかし世を知る人ハ老し菊の花
乙霍　盆の月佛ふとき見る哉
空阿　某一把ある柿をもて啼けるかな

釣の餅に行もなき時百舌の声　田禾

よその菊由りけなと呼ひ名う　芦丸

虫啼や兵丁の臭ぬ古むしろ　玉洋

大とりてあらしろ孫ぞ残りくれ　文左

蕣やちりなき蔓のいつこまて　月居

良夜雨すかきいそりかてうきもとり

見よ人と乞おしきそて又来ろもののふ

あらしてハ今肩にあふてもみけ　楷の竹

待人の傘そともちらくハ戸さし　竪子

あけもあちてに乞ひとりけの汁あけぬ

名月の雨とぬるゝさらに露の都　千尚

一年もむし東ありまに葉の子申ん見まても人

あらゆる農のわさはさるしとそ　けし子安見を

行る宿家にまけて かきなすしてハぬるゝ されハ

すゝきも通りれ縁ハ鋤鍬もよくまるさるすに
大あらひしてあるうちくのまちひ中にちとの
身こなき安なれとひらとそ

けふ乃夢みも秋の中よへうゐ　標壹

心のよれ皇ハつまし居のこゑ　無聖

山伏の通り節なり萩芒　金色

通りのけて麻の跡うら晩稲かな　丁斎

出代りの子世をしら菊をかて来なり　ゝ

花とてハ野菊のさかりまの行ゑ　鈍明

くら盆や雲ハ西へ　東へ　寸計

あきハ侘く松に鼻を男扇かな　花陶

萩薄をまや見えて晴る西の扇　篭翠

秋の夜や起て見られハ西ゐなる　桐山

むしり絹戸か胱のはすへる宿る哉　許風

一世にハ石の上人に住居といふ望き人あるに御中

沖の鴎ハ中〻也り一里ゟも無らぬ水を見てに
石を切く所と為之木と為之責出しゝ中ゑ
すゑハうきてほ縁ミ小兆

納息ナ為んまとるてさし縁ふ　墓居

年〻ふ庫を守る夜っ承て小多　己千

世すあれハ如納し月日の業之子ふ　千當

さの宿ハ為しみも為くて庫の声　三完

如とけや野ふの術れ山乃月　物價

此ぬ夜のあけハ氣色や花芒　皇雄

夕られれ氣又うり出ぬすきハ於　瑶馬

初うりと出すひしよ蜀も世下の广　古虫ヽ

納息の立と為ふ人を日うけ於　尺文

あきハ露や夜ふ稀てる葉の麻　蝸虫

蓮ハ言為　ホう唳れ　秋の色　升六

一ト渋广をとめくりてひち笠雨のうりあれハ海士ろ

家な袖まもらしは月の雨と朱樹蒸ハきえし
こちは广せさめてとられぬ秋の音と方明ハつふ
書て山寛の清句まを安居は

粉さかね葬ハおもし鋼おもく　士郎

晨まくはすゝふ西山に乃月　于當

きの里ハ庭の従来ま望ばれて　孫道

培のうへみも露よ松の紫　松兄

おつ宮の色つきりと婦く夕暮ま　行風

術のゑむけハ人かゆうおもり　奥村

木啄ハ花の石踏をおさやし　方明

樓门ちくまこゝちりかく　楽二

こけの花せこゝを塗りとくるを　扈翁

春ゆへこおもひちも探題おもしきい　柳五

物思ひ武庫の嵐よ吹通り　帰山

世な蛸壺の字かひもおもし　郎

月のある家を早くも隠したり　角

〇ふるこぼす雨の萩かな　風
かり稲と雀の友を待合　兄
牛蒡をもかりて伊勢の塩奥　明
山のまに花おきし宿ハありけり　村
かすんで見へぬ松川のすゑ　家

一番鶏鳴る見塔ちよいと一寺のこあかりあんれ
茶屋も今れハよそて碑も出たきしあり　杉明

〇まけに合ひの碑より茶の友度調へて
母拙よろしくとあし

さゝくの風情を月の琵琶に　廉野
けはの雨にも月のきぬいりなし　阿彦
夕ざれにいく秋もまきて秋の月　素琴
夕くれや暑に世これく天の川　壷伯
所や稲て見る天の川　ラ故里
花の色をまふにちらけく星に見　千雪

すゞとるゝや苗田のそよぎ哉　康吉

おぬきもしほる枝や芋畑　道喜

露ちるや野の心のまぎれ川　乙二

一 松室乃仲算か琵琶やもとしかりけんある夜
竹生嶋へ詣し人のあまりに床しきおりふし
小侍のことさらまたハ宗のかきもの集てこの所に
へうとりよ小侍か心くしてたくはへ侘のまの
あしまつまへしいさ禰をふかくそへかんかくく
ゆかしく柿のゝ茶まかし母ふきかきし荒根の
鏡まわりにかゝりのく儀しきほうのてゝてらとても
おぼれ八柿ふせしまへおさのいけるとそ

ほれにて来るやかけ小鷺子の足跡　閑叟

むやくと松ふ新たく菊の花　百兆

順康の古アの墓をとゞりけり　天民

雲の穂や峯の木の秋の雲　世竹

宮城野や只の草さへ萩めけり　五晋

物ごとの目のおふあり三上山　仙風

中庸のをしへにかなふ根なし草　青人

今の月拵さへ京もなかりけり　老思

此松や川に傾く錦花　亜聖

降りてハ水のゆきしく通りけり　全亀

出代の一夜も二夜も秋見ぞふ　鈍明

中庸のように雲をとく峠うか　千當

むかしや松葉の池むきの上　棠居

一ある人年久しく住なれし家あれど、さる幸ありて家相見せけれバ、志ありて不吉なりといふにまかせてことをかりて相よくなしたるよ、まことその借ぬるにおゝて是家をかなしく思ふに、家内ねくしいつともなく遠ざかりけるとなり

初冬や客にかしこく古袷　呉笠

静さは花の主許の芒なる　莫二

身なことに白き旗子のひらくなる　又呼

秋なれや走り行まろの浪路　浪世

あもあり房まわれの乞まろに　文花

石崎や焚火のまわりかるの上　色梁

蘆より出くすきのあるし哉　黒山

秋の日は低くして入なかり　桃下

湖に向てちいさい家は月夜に　丑之

雨の萩あまりて秋の夜明かな　半日房

釣竿やちかひの竿　耳盃　唇凡

あるか日幻住庵に詣て御上を見れは

うら主庭の景はよりその一の先松へ

通て舟渡して出行ら笠かつり手拭

なら藤ひく日のなるをまへいとふ身の暮

は小舟に命をまかせて湖底いふそ八たや

見るといつもの蛍のあるたの笛あるき笛

きくにあそふ気を保つ哉

秋の夜や憚い小笹の宿し舟　千當

一ある人年のよるをなけきていつの年も四十
あまりといひ又ある人ハ是まてはわか歳に八十
あまる八九十あまりと計上へし年よりも望者あり
とて咲しうるへしといつもの見るいつもの眺を
知る事に身ハむかしくれぬ菊の花　士朗

見て居るも折る日ハ出来る之の花　花陶

月の影を望に松風　千當

あら河本の花をよ一所の万り兼て　陶

扇り似たる尾干んなかり　南

茶を煮つる人の掃除の物ひろ　陶

はほそかかちなるむかれ蓑　丶

居眠りて馬を落すと啼蛙　南

雛の一夜のあけぬゆく　陶
やきし火の風ハ情の身哉　為
山田ゟ雲をもちらしける　陶
鳥捕の先へまわれハ呵られて　為
また翔口の山茶花を切る　陶
吸物に工夫の手ぬき此月　為
琴近とく鴫のうちちらかふ　陶
年寄追あしるゝと親子のわかれ山　為

千代のもろまつり　瓢ならまれ　陶
匂付く筆ゥ茶毎の花ならぶ　為
物の霞をくりむ山向　、
あさき日をもてはして鐘撞て　陶
唖にハおしき、男ありけり　為
織りけの衣をひろけて袷みて　陶
小鍋かけての家にほまあき、　為
笛吹きのあやまる人　欣慶　陶

国立国会図書館　タイトル『関清水物語』　請求記号 863-137　ガラス使用

茎引ことに蝶もちりかねて　　南
火を焚ハ太ミ尼をつゝむ上　　陶
しほゆく鐘をきゝて灌頂　　南
下駄はまく曲りけしとつまさきで　　陶
ちらして見せる庭のちる萩　　南
琵琶弾り清世に来る豆の月　　陶
秋のかけとる猿別の蛙錦　　南
うせ中りは古きいもろを押へつゝ　　、

清はまけく髪をこハうれ　　陶
紙ももちを唄につまる梓巫女　　南
なんとまう島れ実の家の香　　、
人この花の手紙をよそとおく　　陶
春の名残かなに猶活の芽　　、

附録

もくれまぬ世こゝろ恋しく思ふれハ　　希言

菜汁ハ水ましもよろし杜若　石乞

星のふるほどや七月乃浮御堂　子賀雄

ある海や今まであらし三日の月　文角

すし石も足を定め清水かな　双鳥

杜若さく時庵の夜明かな　呂一

御山ハ子年も飾もとらぬ菊　来杞

かしこくも庵の留守やきりぎりす　竹茲

虫の声さそふ松の露落す　鳥来

跋

投簪桂冠寄生雲水野服葛巾付口烟月其出家則軽〻行李一斤蓑笠足以縦其行脚矣其在家則寐〻杖窓一縷茶煙足以養

其性情矣此是誹歌者流之活計　何書之風流也吾邑于當旹嗜誹歌之者亦滿邑余一之余未知誹歌何以贊一言然其話縷々續成聯句亦是風流之新手段也故喜其才之花見屋以爲字于時文化己巳冬臘月十一日寒氣浅春暗香滿窗

華月禅居士書

863
137

蕉門俳諧書林
京三條通寺町西
菊舎太兵衛
和漢之書物并經類其外色紙短冊画半切
板木細工之摺物小法用等仕付可被下以之

国立国会図書館　タイトル『関清水物語』 請求記号 863-137
ガラス使用